

まんだら通信

第249号 (通巻283号)

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

平成29年04月 西暦2017年 佛誕2576年 皇紀2583年

教育勅語百三十年

今から三千年前、縄文の昔から私たち日本人は山や海、獣から虫や魚の類まで、そこに『神さま』を感じてきました。そして私たちが生きる上で必要だったとは言え、殺さなければならなかった生きものたちへの感謝と供養の心をこめて『鯨塚』『虫塚』などを作りました。海辺に近い、ここ南房総にもあちらこちらにあります。

それどころか人間が作った道具も、最後まで丁寧に扱いました。『筆塚』『針塚』などもありますね。

縄文時代の貝塚は、集落の外れではなく中心にあります。貝殻や魚や獣の骨、欠けた土器や亡くなった人も、作法に従って埋葬されています。このことから、しろうとの考えですが、要らなくなったものを捨てる「ごみ捨て場」ではなく、感謝の心を込めた墓地だったのではない



か、と私は思っています。

さて、人が定住生活をするようになると、祖父母、両親と子供、という家族が出来ます。日本人は他人との調和を殊の外に大切にしますから、我が俵を引つ込めて相手の考え方に添わなければ、『村』という社会での折り合いが保てなくなる時もあります。

私がそうだとはいませんが、こういう時子育てが終わる、人生の経験が豊かな年寄り、家庭の中での物差しとして有難い存在ですね。日本に限らずお年寄りが尊敬されるのは世界共通のことです。

この『村』という社会を地球全体に広げた場合、日本という国はまさにこの家族と同じ関係になります。この場合の祖父父母の役目は、皇室ということになります。

当たり前すぎて、私たちは不断は忘れていますが、天皇陛下は、毎日、日の出前から御先祖の神々に日本と世界の平和をお祈りしています。このように「国民の幸福を祈る」元首は世界でただ一つ、日本だけだそうです。

そして、祈るだけでなく、自分の知識教養を高め、質素に過ごすことに努めておいでになります。

時代が大きく変わる時、何が大事か混乱が起きることがあります。文明開化でヨーロッパの仲間入りをした頃、まさにそのような時代に、人はどのように生きるべきか『教育勅語』が發布されました。明治天皇のお名前を借りて、山形有朋内閣の法制局長官だった井上毅さんが中心になり草案を作ったのだそうです。

「親に孝行をし兄弟仲良く、夫婦は仲睦まじく、いつも謙遜の心を忘れず、社会のためになる仕事に勉め、人格の向上に励み、法律や規則を守って世のために尽くそう。万一、外敵の侵入があった時は、勇気を奮ってこれを撃退することが、皇室に尽くすことです。」

もともと短い勅語ですが、端折っていえばおおよそこの通りですね。この中で「皇室に尽くす」ことが軍国主義の復活だから問題だという人があるのですが、そもそも外敵が侵入してくる時、奴隷の辱めを避け

るため、やむを得ず命を捨てる覚悟で武器を持つて戦うのは、誇りのためであって、どの国や民族でもすることです。つまり、皇室があらうがなからうが何の関係もありません。

戦争反対の幟旗などでデモ行進するのは、物の本質を知らないか、知っていても話をすり替えているのかのどちらかでしょう。

繰り返しますが、日本人は「自分さえよければ」という考えをしません。

日本の国に心奪われ、何度も来日を繰り返したアメリカ人、エドワード・モース先生は大森貝塚の発見者として知られますが、キセルやあんどん、ゲタから陶磁器、茶器や絵画などあらゆるものを買い集めて本国に送り、日本の芸術の紹介でも有名です。

「アメリカは日本の何倍もの人口があり、大金持ちも多いけれども、これらの価値を知る人は極く稀である。」と残念がったということ。日本の職人さんは、自分が作る製品の精度や出来栄に努力します。

長谷川慶太郎さんの著書などにありますが、ハワイの天体望遠鏡の反射鏡、原子力発電所の格納容器、宇宙ロケットの先端、新幹線の重量レールなど、日本でなければ作れないそうです。アメリカ、アップル社の 아이폰。鏡のような表面の仕上げは、新潟県三条市の小さな町工場が一手に任されているのだそうです。インターネットの発展で、玉石混濁、あらゆる情報が一瞬で世界中に広まるようになりました。「四国の山の中で、見ず知らずの私を泊めて食事を振る舞ってくれた。」「忘れ物をしたら、追いかけて届けてくれた。」「落とした旅券が自分より先に交番に届けられていた。」「など。

小遣いを貯めて日本旅行に来た外国人が、写真付きで投稿する、このような話を読んで、治安が良く、身の回り品などに気を使わずに旅が出来る日本に行ってみよう、という別の外人さんがやってきます。

テロ、所得格差、人種差別など、暗い話が多いこのごろ。二十一世紀は日本の出番。

教育勅語の「他人さまの喜ぶ姿を見るのが好き」という「博愛」の精神で、自信を持っておもてなしをしたものだと思います。

余滴

▼寒暖の差が大きかった4月も、漸く春らしい陽気になりホッとしています。お元気でしょうか。

▼佐藤愛子さんの『90歳 何がめでたい』と『それでもこの世は悪くなかった』が、このところベストキングの1位と5位ぐらいになっています。本音の話を読んでみると、そうだそうだと納得することばかりでした。

□先ばかりの建前話に嫌気が差している人が多いということでしょうね。トランプさんが大統領になったことと、相通ずるものがあるように思えます。

▼散髪料金がここ何十年も同じだったことに気がきました。

そう言えばお布施も、もう40年ぐらい同じです。『お志』ではありませんが、私はゆとりがあると思う人は宜しくお願い致します。▼4月8日はお釈迦さまの誕生日。毎年の写真ですがこれは外せません。今年は冷たい雨にたたられて、珍しくお参りの人がありませんでした。然し、このお寺が出来てから1200年あまりの間には、もっと大変なことがあった筈です。それでもこうしてお寺があるということは、地域の皆さんが忘れることなく護持してくれたお陰です。

▼今月の野草はニシキミヤコグサ【マメ科ミヤコグサ属】です。

金色だけのミヤコグサにオレンジ色が混じるとニシキミヤコグサというようになります。海岸道路の縁や砂地に群れて咲く有り様が可憐です。

以前いちどこに掲載したように思いますが、これから梅雨時までの間は、キケマン、ホタルブクロ、ニリンソウ、ハマダイコンやハマヒルガオなど、次々と色々な野草が咲き競い、ご紹介したい写真が多すぎて困るほどです。

2017.04.09 龍渉



にっぽん人情小噺

第二十八話 向上心

えー、人間、なにをやるにも努力というものが大切です。

私が小学生の時には、クラスでいろいろなことに関わった生徒に、先生が「努力賞」という賞状をくれたんですね。

普通の賞状の半分ぐらいの小さな紙でしたが、賞状なんか縁のなかった私は、とてもうれしかった覚えがごさいます。

あとで聞いたたら、これはすべて担任の先生のアイデア。一学期に五枚。ですから、一年間に十五枚。三年間、同じクラスでしたから四十五枚の「努力賞」があつて、一回もらった人はもらえなかつたので、結局は、クラス全員がもらったことになるようになっていたそうです。いまでも覚えてくるくらいですから、子供はこういうことが心に残るんですね。心の温かい先生だつたと思います。

私も素直だつたんですねえ、「努力賞をもらったよ」と家に飛んで帰って、大きな声で叫んだんですから。親も「よかつたねえ、よくがんばつたねえ」とほめてくれたりしましてね。一生懸命努力をする心を、「向上心」と言います。

今日は、そうした「向上心」に関するお話をしたいと思います……。

皆さん、殿山泰司さんという俳優を覚えていらつしやいますか。自分を「三文役者」と言いながら、いろいろな役で脇をしつかりと固めていたユニークな役者さんでした。もうお亡くなりになりましたが、その人生は波乱万丈だつたようですね。

子供の頃に両親が離婚いたしましたして、殿山さんはお父さんといっしょに東京に出ています。でも、仕事がありませんから、愛人に銀座でおでん屋さんをさせるんで

すね。

おでん屋の屋号は、お父さんの愛人太田コウさんの名前から「お多幸」とつけたようですが、この店は代が変わつても大変にはやつています。

二十一歳で新築地劇団に入り、俳優修業をします。ところが、二十七歳で応召、中国戦線を転戦します。復員してしばらくした昭和二十五年、吉村公三郎、新藤兼人といった先輩たちに見出され、以後、殿山さんはどんな役でもこなします。なにしろ、生涯出演した映画は三百本を超えるというから、すごいですよ。

はげ頭にぎよる目。その特異な容貌は大変に重宝がられ、つねに忙しかつたようです。

しかし、さすがにそんな殿山さんでも、六十歳を超えたあたりから、仕事の数がみるみる減つてきました。

日本の映画産業が下降線をたどつたこともありますが、若い監督にはこの俳優を使いこなせなかつたのかも知れませんね。

俳優にとつて、一番困るのは、仕事がないことです。

殿山さん、愛人と暮らしながら、酒を食らい、おいしい料理を食べ、連日の不摂生が続きます。当然、体もボロボロになつてくる。「殿山は、もう使えない」。そんな噂も次第に広まりますから、ますます自堕落な生活に。

そんなある日、若い頃から憧れだつた女優、乙羽信子さんがこう言つて、殿山さんを励ましてくれたそうです。

「あなたには、昔から向上心がないから、仕事だんだん減つていくのよ。つらい時こそ、人の倍、努力しないと」

殿山さんはおもしろくなかつた。「けつ、何が向上心だよ。そんな優等生みたいなこと、俺には無理だ。冗談じゃねえ」

いつの間にか、殿山さんは七十歳を超え

ました。その頃から、それまで不摂生に耐えてきた体がとうとう悲鳴をあげはじめたのです。

心配した乙羽さんは、殿山さんに病院を紹介しました。

検査をしてくれた先生の話によれば、すでに肝臓ガンの末期。余命いくばくもないとのことでした。乙羽さんは、そのことを本人には一切言わないことにしました。

そんな殿山さんにめずらしく、立て続けに三本、映画の仕事の電話が入りました。

二本は田舎の葬式での坊主役、もちろん、ワンカットですが、殿山さんは喜んで出かけました。三本目はやはり田舎の警防団長の役。戦争に行つた夫の帰りを待つ妻が、山の畑で農作業をしているところに、戦死の公報を届ける役でした。

その日の午前中、乙羽さんは偶然、病院で殿山さんと会い、驚きました。殿山さんのおなか妊娠八か月のように大きくふくらんでいたのでした。

「これから、房総半島にロケに行くんだ」殿山さんはうれしそうにそう言つたそうです。

撮影がはじまりました。殿山さんは麓から中腹の畑まで戦死の公報を持つて上がつていこうとするのですが、苦しくて、テストのたびにダウンしてしまします。見かねた監督が上から声をかけます。

「殿山さん、上がつてこなくていいですよ。苦しくなつたら、止まって下から『奥さん、旦那が戦死したよ』と声をかけてください。こつちから下りていきます」

そして、いよいよ本番。殿山さんは必死で山を駆け上がります。心臓が胸から飛び出しそうです。それでも、殿山さんの足は止まりません。ヨタヨタしながらも、一歩一歩山道を進んでいきます。ようやく、畑に。殿山さんは顔面蒼白。息も満足にできません。

「カット！これで殿山さんの出番は全部終わりました。ご苦労さまでした」

「ありがとうございます」

殿山さんは、深々と監督やスタッフに頭を下げました。それから、やつとの思いで家に戻り、「疲れた」と言つて床につき、眠つたまま、二週間後に亡くなりました。殿山さんの遺体にすがりついた乙羽さんは、その時、こう言つたそうです。

「最後のロケの話、聞きました。立派よ、あなたにも、向上心があつたわよ」平成元年四月三十日の話です。

今月も、MOKU出版と著者三遊亭鳳豊師匠のご好意による転載です。ただ、今月号のMOKUはまだ届いていませんので、一昨年四月号のお話しです。

もうらのてんばたけ 真浦の天畑

この『向上心』は和田地区真浦の天畑が舞台になっています。

私はその場所にいったことはありませんが、急な上り坂の上にあるようです。田宮虎彦の小説『花』の舞台になり、殿山泰司さんが出演しました。